

[Memorabilia]

—Pethau Cofiadwy mewn Astudiaethau Cymraeg—

Rhif 2. 吉岡 治郎：ウェールズ語の色彩語 'glas' について

Dafydd ap Gwilym (英語になおすと David, son of William) は、中世ウェールズの最も優れた詩人、あるいは、ウェールズ全時代を通じて最大の詩人であると目されている。14 世紀前半のおわり頃を中心に作品を残し、英文学を代表する詩人の一人 Chaucer に先立つことほぼ半世紀である。この詩人の名がウェールズ文学以外に広く知られるようになったのは、多分、*The New Guide to English Literature 1. Medieval Literature Part Two: The European Inheritance* (1983) に含まれている、Patrick Sims-Williams による 'Dafydd ap Gwilym and Celtic Literature' を通じてであろう。このケルト学の碩学による紹介は短いものであるが、色々と示唆に富む。

彼の詩の一つに 'Mis Mai a Mis Ionawr' (文字通りに訳すと、The Month of May and Month of January で、ウェールズ語では名詞が並列した場合、通常、後の名詞が前の名詞を修飾する) があり、「一月」で冬を、「五月」で夏を表しており、「五月」を称えている。Dafydd ap Gwilym には、別に 'Mawl i'r Haf' (Eulogy to the Summer) という詩がある。この二編の詩については、既に注解を試みた。この 'Mis Mai a Mis Ionawr' の l. 26 に、'glaswawn' という語が出てくる。この語の含まれる 2 行を引用すると、'Ac wybren loyw hoyw brynhawn / Fydd, a glwyswydd a glaswawn.' (昼下がりの空は明るく楽しく、樹々は美しく、ねずみ色の遊糸浮かぶ) であり、'glaswawn' は「ねずみ色の遊糸」と訳した語である。

各言語の持つ色彩語の数、また各色彩語の持つ色の幅などは、歴史的経過を経て各言語独自である。基本色彩語については、著名な Berlin, B. and Kay, P. の *Basic Color Terms, their Universality and Evolution* (1969) の基本的研究以来、色々と研究が蓄積されてきている。また、個々の言語にあっても、それぞれの色彩語についての共時的、通時的研究が盛んであり、多くの綿密な研究がなされてきている。

前出の 'glaswawn' は、'glas' と 'gwawn' の合成語である。ケルト諸語では、語頭子音が色々な条件下で、他の子音に変化したり、脱落するという現象があり、通常これを「レニション」Lenition と呼ぶ。'glaswawn' の 'wawn' も、語頭子音の 'g' が脱落した形である。'gwawn' は 'gossamer' [空中に浮遊したり、草にかかっている小さくもの巣 (糸)] である。ここで問題にしたいのは 'glas' の方である。この色彩語 'glas' が、その占めている色の幅が他の言語と異なることは、ウェールズでは当然のこと知られていたが、そのことを紹介して、言語の研究者達に初めて注意を喚起したのは、日本でも名の知られているデンマークの著名な言語学者 Louis Hjemslev (1899-1965) である。このことは最初 1943 年に出版された *Omkring sprogteoriens grundlaeggelse* の中で取り上げられたが、一般によく知

られるようになったのは、その英語訳版である *Prolegomena to a Theory of Language* (1961) を通じてであろう。

ここでは英語訳から引用する。

In Welsh, 'green' is *gwyrdd* or *glas*, 'blue' is *glas*, 'grey' is *glas* or *llwyd*, 'brown' is *llwyd*. That is to say, the part of the spectrum that is covered by our word *green* is interested in Welsh by a line that assigns a part of it to the same area as our word *blue* while the English boundary between *green* and *blue* is not found in Welsh. Moreover, Welsh lacks the English boundary between *gray* and *brown*. On the other hand, the area that is covered by English *gray* is interested in Welsh so that half of it is referred to the same area as our *brown*. A schematic confrontation shows the lack of coincidence between the boundaries: (pp. 52-53)

との説明がある。これではなかなか分かりにくいですが、次のような図示が理解を助けてくれる。

	<i>gwyrdd</i>
<i>green</i>	—
<i>blue</i>	<i>glas</i>
<i>gray</i>	—
<i>brown</i>	<i>llwyd</i>

ここに例示されているウェールズ語の 'glas' は、英語の 'green', 'blue', 'gray' を含む場合があるということである。ウェールズ語最大の辞書であり、1950年に編集が始まり、2002年に一応完結した（完結の直後から最初の部分の前面的な改訂が始まり、2003年に第1分冊が、2005年3月段階で第4分冊 [Amaethyddiad-Anafod] が出版された）。

Geiriadur Prifysgol Cymru (A Dictionary of Welsh Language) [略称 *GPC*] の 'glas' の項 (1968) の説明は次のようになっている。

1. blue, azure, sky-blue, greenish blue, sea-green.
2. green, grass-coloured, bluish green, verdant; unripe (of fruit); covered with green grass, clothed with verdure or foliage.
3. (a) light blue, pale-blue or pale-green, greyish-blue, slate-coloured, livid, pallid, pale; ?transparent (of water, glass, rain), crystal grey (of frost and ice), grey. (b) silver or silver-coloured, (c) greyish white, steel-coloured, iron grey. (d) grey, holy (of clergymen or clerical garb).

以下は比喩的な用法であるので省略する。上文中で 'gray' と 'grey' と統一を欠くようであるが、原著のままの引用であり、いずれかに統一することはあえてしなかった。

さて、'glaswawn' を引用した前出の詩 'Mis Mai a Mis Ionawr' ('五月' と「一

月)の冒頭の部分に、Hawddamor, glwywsgor glasgoed, / Fis Mai haf, canys mau hoed. (ようこそ緑の森の素晴らしき合唱隊、夏の五月よ、私の待ち焦がれしもの)があり、そこに‘glasgoed’という語が出てくる。この語は‘glas’に‘coed’(=wood)のレニションを起こした形‘goed’が付き一語となったものであり、この個所では「緑」の意味がふさわしいと考え、「緑の森」と訳した。一方、‘glaswawn’の方は、GPCで‘grey gossamer’とあり、Dafydd ap Gwilymの詩のこの個所が引用してあるし、「くもの巣」ということで、筆者は「ねずみ色の遊糸」と訳した。ウェールズの学者達は、Bromwichは‘fresh gossamer’と訳している。確かに‘glas’には‘fresh’の意味も記録されている。また、LoomisとGwyn Thomasは、いずれも‘green gossamer’, ‘gossamer-green’と訳している。‘green’を採用した訳者は「樹の葉の緑」を反映しているのとったのであろうか。

この‘glas’が、Dafydd ap GwilymのY Gwynt (The Wind)という詩にも姿を現す。Dafydd ap Gwilymは自然の観察にも優れた能力を示しており、そのことは彼の詩にも十分に現れている。この「風」という詩にもその現われを十分にうかがうことが出来る。「風」という詩に次のような個所がある。

Nythod ddwyn, cyd nithud ddail, / Ni'th dditia neb, ni'th etail /
Na llu rhugl, na llaw rhaglaw, / Na llafn glas na llif na glaw. /
Ni'th ddeil swyddog na theulu / I'th ddydd, nithydd blaenwydd blu.

(ll. 13-18)

(お前は鳥の巣を掴み、木の葉を飛び散らせるものの、お前を咎め立てする者もいない。迅速な軍勢も、執政官の手の者、青き剣も、洪水も雨もお前を引き止めはしない。木の梢の羽根を散らすお前をお前の生存中(吹いている間?) 武官も兵もお前を止どめはしない。)

ここに出てくる‘llafn glas’ (青き剣)の‘glas’だが、BromwichもLoomisもGwyn Thomasも、‘blue’と訳している。筆者も「青き剣」にも少し抵抗があったが、光の加減でそう見えるかとその時思った。後にHelen Fultonの*Dafydd ap Gwilym and the European Context* (1989)を開いていて、この個所の引用があることに気付いた。そこに付されている訳では、‘grey blade’とある。上のGPCの引用の3.(c) ‘greyish white, steel-coloured, iron grey’が適切かと今は考えている。上述のように、この‘glas’の英訳に当たっては、ウェールズの一流の学者達の間でも、時にはその色のどの辺りを選んで訳すのかということ、揺れが生じる場合がある。

色彩語‘glas’について上に述べたことは、Standard Welshにおける状況であり、Modern Colloquial Welshにおいては状況は異なるようである。即ち、Edwin Ardener編*Social Anthropology and Language* (1971)のArdenerによる長文のIntroductory Essay (ix-cii)には、英語とStandard WelshとModern Colloquial Welshが併記されているので紹介する。Ardenerは、アフリカ西部の言語、Ibo語も併記しているが、ここでは直接の関係がないので、Ibo語の欄は省略する。

ENGLISH	STANDARD WELSH	MODERN COLLOQUIAL WELSH
green	gwyrdd	gwyrdd
blue	glas	
grey		llwyd
brown	brown	
black	du	du

この表を見れば分かるように、Modern Colloquial Welsh にあつては、'glas' は極端に色の幅が狭くなり、英語の 'blue' 一語に対応している。他の語もすべて英語に対応しており、'brown' の場合は英語からの借用語をそのまま使用して、英語の影響の大きさが実感される実態である。Hjelmslev のような学者が述べたことでもあり、ウェールズ語の外では知られてい

なかつたことで注目をあび、Standard Welsh における 'glas' のことは、種々の言語学の概論書でも紹介されてきたが、この Modern Colloquial Welsh の状況については、その後紹介されることがほとんどない（1970 年代の初めに報告がなされており、それから 30 年も経過している）ので、参考のため、あえてここで紹介した。口語の方が文語より周囲の言語の影響をより受けやすいのはいずれの言語にも見られることである。